

## 巻頭言（2014年3月号）

理事長 新谷友良

### 久しぶりの沖縄とフェヌカジ（南風）

1月25日・26日と全難聴の福祉大会で、10年ぶりに沖縄に行きました。空港から街中までのモノレールと立派なバイパスができていましたが、会場の沖縄県男女平等参画センター近くの白壁の家々は以前の通りで、周りには暖かい風が吹いていました。

人口の減少が続く日本の中で、沖縄は人口が増え続けています。県外からの移住が多いといわれていますが、人の流出が少ないことも原因のようです。福祉大会の分科会で沖縄の就労についての報告を聞きながら、人口が増え続ける沖縄の不思議さと障害を持った人が普通に暮らすことのすがたをだぶらせて考えていました。

報告の中に石垣島の就労事情の現地調査についての話がありました。その中で「聞こえについて特別な支援は受けていないけれど、周りの人と楽しく仕事をしていて、島から出ていきたいとは思わない」という難聴の方の話が紹介されました。この方は、周りの人の声が少しは聞きとれる、補聴器などを使って会話ができているのかもしれませんが。あるいは、周りの方が筆談などで目立たない気配りをしているのかもしれませんが。

私たちの暮らしは、コミュニケーション支援の制度が整備されて大変楽になってきました。病院に行ったり、勉強する場に手話通訳・要約筆記の方が一緒に行ってくれると、安心して必要なコミュニケーションができます。支援の制度を使わなくても制度のある安心感は大変なものです。あとは、制度を利用するほどでもない事柄や簡単な話し合いをどうするか？私たちの毎日の暮らしは、このようなコミュニケーションに満ち満ちていますので、聞こえに障害を持った人にとっては、このちょっとしたコミュニケーションが大きな問題です。あるいは補聴器で、筆談で、身振りで、そして手で肩を触れたり、表情をちょっと変えることで交わりは広がり、ずいぶん心が豊かになる気がします。

“フェヌカジ”は肌触りがとっても快いものでした。翌日の発表があったので深夜の飲み歩きはできませんでしたが、那覇は飲んでもタクシーはワンメータ（初乗りは500円）位でホテルに帰れます。この温かさといつでも人に会える適度の広さが、ちょっとしたコミュニケーションにはとっても大切かもしれない、飲み足りないホテルの部屋でそう考えていまし

た。